

## 共に生きる夫婦

〔聖書〕創世記 2 章 18～25 節

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができな かった。主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が 彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わた しの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻は二人とも裸で あったが、恥ずかしがりはしなかった。

### 〔序〕天地創造の素朴な文書

西川口教会越谷伝道所の教会員KY兄(79 才)が去る 11 日(水)の夜に心不全で急逝されました。西川口教会も越谷伝道所も牧師が辞めて、現在後任者がいません。Y夫人は結婚前目白ヶ丘教会員で、私たち夫婦とずっと一緒だったので、葬儀の司式をお引き受けすることになりました。昨夜の前夜式に続いて今日の告別式は越谷火葬場の都合で午後 1 時開始。そこで礼拝プログラムを変更して説教を繰り上げ、説教後に中座させて戴かなければなりません。後の部分は山下先生にお願いしましたので、ご了承ください。

紀元前6世紀のバビロン捕囚時代に記された天地創造の記述では、万物を全て創造された最後に、神さまはそれを管理する役割を担う者として、人間の男と女をご自分にかたどって創造し、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」と祝福されたのでした。しかしその天地創造文書よりも3世紀も前の紀元前9世紀に書かれた素朴な記述の創造物語が、創世記2章4節から始まっています。山下先生が先週、その文書の第一回目を説教されました。第二回目の今日は共に生きる夫婦の絆について学ぶことにいたします。

### 〔1〕 彼に合う助ける者とは

神さまは「人が一人でいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」とおっしゃって、家 畜や鳥や獣をアダムと同じくアダマ(土)で形づくりました。アダムはその生き物に名前 を付けて呼びかけ、会話を交わそうとしましたが、人格的な交わりを結ぶ相手は見出せま せんでした。そこで神さまは、アダムを深く眠らせ、彼のあばら骨の一部を抜き取って女 を造り上げ、彼の所に連れて来ました。

アダムは喜びの声を上げました。「ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう。まさに、男（イシュ）から取られたものだから」。骨と肉、即ち骨肉とは家族・身内の者を指す言葉です。こうして男は身も心も一つになって共に生きていく相手(女)を与

えられたのでした。

しかしこの記述には、昔から批判が向けられてきました。神さまは先ず男を造り、その助手として女を造られた。しかも男の体の一部で女を造られた。女は男に従属する者・男より劣った者なのか。皆さんは、この記事をどうお読みになりますか。確かに新約聖書のコリント教会への手紙の中に「女の頭は男」とか「女が男から出て来た」「女は男のために造られた」(第一、11章)という言葉があります。しかしそれはコリント教会の中の特殊な状況からなされた忠告であって、創世記のここでの記述は、男女の優劣や秩序の根拠となるようなものではないと思います。

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」の「彼に合う助ける者」は、口語訳・新改訳では「ふさわしい助け手」と訳されています。この「ふさわしい」は「向かい合って対応する」という意味です。また「助ける者」「助け手」と訳したヘブル語の「エーゼル」は「助け主である神さま」を指す場合が多いのです。代表的な例は詩編 121 編でしょう。「わたしは山に向かって目を上げる。わが助けはどこから来るのか。わが助けは天地を造られた主から来る」。

ですから男(イーシュ)と向かい合って共に生き、彼を支え、守り、神の助けをもたらしてくれる骨肉としてのイーシャー(女)であって、男に従属する助手という者ではありません。アダムは、身も心も一つになって共に生きていく相手(女)を与えられたのでした。では神さまによって出会うことが出来た男と女が、それからどのように生きたのでしょうか。

## [2] 家庭の崩壊

ここで旧約聖書の中で最もよい組み合わせと言われたイサクとリベカ夫婦について、見て参りましょう。イサクはアブラハムが 100 才、サラが 90 才の時にやっと与えられた秘蔵息子でした。アブラハムは一番信頼する年老いた僕を自分の出身地に送り、同族の中から、イサクにふさわしい嫁を探してくるように頼みました。

老僕が一生懸命に祈って探し当てた娘がリベカです。豊かな家の美しい娘でした。気立が優しくて、良く気がついて身惜しみしない働き者、しかも決断と実行の人でもありました。まさに三国一の花嫁でした。イサクは荒れ野に良い井戸を掘り当てる名人でした。井戸を掘るには根気がいります。彼はねばり強い人だったようです。しかもせっかく良い井戸を掘り当てても、此処は俺の縄張りだと難ぐせをつけられると、貴重な井戸を幾つもゆずっています。争いを好まない温和な人柄でもあったようです。このように家柄といい、人柄といい申し分のない二人の結婚でしたから、さぞかし三国一の幸福な家庭が出来たはずなのに、現実とは全く異なる結末になってしまいました。夫婦が家督を二人の息子のどちらに継がせるかで考えを異にし、結局家族4人がバラバラになってしまったのです。

家庭が崩れるという事態は、或る日突然に起こるものではありません。白蟻に喰われるように、大事な土台や柱が内側から長い時間かかって、少しずつ蝕まれていき、その上で何か事が起こった

時に、崩れてしまうのです。ですから私たちはイサクとリベカ夫婦の悲劇を良く学んで、自分たちの教訓にしなければなりません。

### [3] 心が一番求めていること

イサクは 40 才で結婚し、60 才の時に待望の子、しかも元気な双子の息子を与えられました。数字をそのまま事実として受けとれば、20 年間待ち続けたこととなります。男中心で 家系を大事にするユダヤ人社会では、かつての日本もそうであったように、妻が跡取り息子を産めなければ、他に妻を得て子どもを生ませることが当然と考えられていました。ところがイサクはリベカ以外の妻によって子を得ようとはしませんでした。

聖書はこう記しています。「イサクは妻に子供ができなかったので、妻のために主に祈った」(創世記 25:21)。妻のために主に祈った——何という素晴らしい言葉でしょうか。祈りがかなえられるのに相当長い期間かかりましたが、イサクはくじけることなく祈り続けたのです。彼がリベカをどれほど愛していたか、トラブルのない平和な家庭を築こうと願っていたかが伝わって来ます。

一方のリベカも神さまに祈る信仰の人でした。おなかがひどく痛んで無事に出産できないのではないかと不安になった時、すぐさま礼拝所へ出かけて行って祈っています。このように祈る夫婦でありながら、どうして二人の家庭が崩れてしまったのか。それは二人が一緒に祈り合っていなかったからだと思います。それぞれが祈ったにもかかわらず、「一緒に祈り合った」という言葉が聖書に見当たらないのです。

もう一つ見逃せない原因があります。それは「イサクはエサウを愛した。しかしリベカはヤコブを愛した」(創世記 25 章 28 節)という言葉です。巧みな狩人でたくましく野山を駆けめぐる兄のエサウはいかにも父親好みの息子でした。一方弟のヤコブは穏やかで家事の手伝いをよくします。いかにも母親好みです。夫婦が二人の息子をそれぞれ偏って愛したのです。

こうして家督をどちらに継がせるかという時になって、リベカは目の見えなくなったイサクをだまして、ヤコブをエサウだと思い込ませて祝福の祈りをさせてしまいました。20 年もの間他に妻をつくらず、祈り続けたほどに仲の良かった夫婦が、子供に家督を継がせるという子育ての完成点で妻が夫をだましてしまうという夫婦に成り果てていたのです。

どうして二人はこの重大な食い違いを、話しあって解決しておかなかったのか。祈り合うことをしなかった夫婦は、一緒に話し合うこともしなくなっていたのです。夫婦が互いに心を通わせることを大切にしていなかったのです。

癌で命の日々が限られたことを知らされた人たちが一番望むことは、親しい家族や友人と出来るだけ時間を過したい、そして心おきなく話し合いたいということだそうです。真実の会話こそ、人間の心が一番望んでいることなのです。若い二人が人生のいろいろな問題を乗り越えながら、老年

を迎えます。その時に夫婦がどれだけ心を合わせて、納得のいく人生の幕引きを一緒に出来るか——そこに結婚生活の一番の幸福があると私は思っています。

#### [4]会話を大切にしなくなった原因

イサクとリベカはどうして会話の貧弱な夫婦になってしまったのでしょうか。イサクは一族を率いる者はたくましい男でなければならないという信念を持っていたと思います。また長男が家督を相続するという社会通念をそのまま受け入れていたことでしょう。そのような信念とか社会通念に従って、何の疑問も持たずに子供を育てていくと、人に相談したり、助言を求めたりしなくなります。夫婦の会話も乏しくなっていきます。

なぜリベカは、目が見えなくなった夫をだましたのか。理由がありました。彼女は双子がおなかの中で押し合って苦しんだ時、礼拝所へ行って祈りました。そして「兄が弟に仕えるようになる」という不思議な神の言葉を聞き取りました。ですから彼女は夫のイサクに、神さまの御心通り弟のヤコブに、手をおいて祝福させようとしたのでした。

しかし神さまの御心ならば、夫をだましてもよいのでしょうか。神さまの御心に反すると思われることを夫がしようとしたのなら、なおさら夫とよく話し合うべきでした。そして夫婦一緒に神さまの御心をたずねて祈るべきでした。

もう一度言います。自分の好き嫌いの感情とか、信念とか、社会通念等に従って、疑問を抱かずに自分の生活を送っていくと、人に相談したり助言を求めることがなくなっていきます。夫婦の会話すら乏しくなっていきます。このことをイサクとリベカ夫婦が教えてくれています。

結婚式で必ず読まれる聖書の言葉は、「こういうわけで、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」(創世記2:24)です。ここに使われている動詞「離れる」「結ばれる」「一体となる」は三つとも未来形です。日本語訳ではそれがはっきり出ていなくて残念ですが、英語訳では shall、will がきちんと使われています。「父母を離れる」とは親離れ、子離れすることです。夫と妻のどちらの側も、親離れ・子離れしないと二人は夫婦として深く結ばれて一体となることは出来ません。「結ばれる」とは人格的結合です。お互いに相手の語ることに耳を傾け、心をこめて聴くことによって次第に深められていきます。

夫婦の一体性は、結婚式を挙げた、自分たちの住居をもった、一緒に旅行をする、子供を生み育てているということで、自動的に手に入るものではありません。時間をかけて言葉を交わし、聴き合い、一緒に考えて行動することによって次第に実現されていくのです。

#### [結] 神さまの結び合わせを信じて

「こういうわけで」とは、神さまが二人を骨と肉を共有する者として創造し、互いに助け合う者として引き合わせてくださったからという意味です。そこには神さまの意志が働いているという信仰がありま

す。神さまが結び合わせて下さったのですから、生まれも育ちも考えもどんなに違っていても、二人は必ず一体になっていけるという信仰があります。

神さまを信じる者には絶望はありません。たとえ今は豊かな会話に欠ける夫婦であっても、神さまは必ず変えてくださいます。人生の終わりに、「私たちは幸せ、本当に幸せ。どうもありがとう」と言える者にしてくださいませ。神さまの導きを信じて、一体となっていく結婚生活を送っていく者になりましょう。

完